

にちよう 特報

英語教育熱が高まる日本で、学校の一部授業を完全に外国語で行う「イマージョン・プログラム」が脚光を浴びている。同プログラムは今や、多くの国々でバイリンガル(2カ国語を話せる)育成法として定着。米国では、日本語や中国語など、さまざまな言語に適用されている。米オレゴン州ポートランドで、プログラムの実情を探った。(枝川敏実、写真も)

バイリンガルに育ってね

小学校から外国語漬け

ポートランド市のリッチモンド小学校。幼稚園併設の公立校(児童・園児計三百十一人)で、一九八七年に日本語のイマージョン・プログラムを導入した。同校は教育関連の受賞も多い、外国語教育の名門だ。

□交互に授業

授業は国語など一部の教科を除き、ひとつの科目を英語教師が教える部分、日本語教師が教える部分に分けている。算数なら文章問題は英語、図形問題は日本語といった具合だ。一クラス二十五人で、一年に二クラスがあり、午前と午後で日本語と英語の授業を交互に入

イマージョン・プログラム「浸すこと」という意味の「immersion」が由来。学校の授業を外国語で行い、「外国語漬け」にすることで、自然な習得を目指す。一九六五年にカナダ・ケベック州で英語が母国語の子供たちにフランス語を教える手段として開発された。その後、世界各国に広がり、日本でもここ数年、導入する学校が増えている。道教委も、二〇〇七年に登別で開校する中高一貫校に導入する。

米ポートランドのイマージョン・プログラム



リッチモンド小で授業を日本語で行うイマージョン・プログラムを受ける子供たち。1年生のガブリエル・ベラー君(左)中央は「いつか日本に行ってみよう」と話す

3年生、日本語で算数

と子供とのやりとりも日本語だ。教師「さあ、この答えが分かるか」

児童「エイト(8)」
教師「今は日本語で話していた一年生のジョー・ギブス君(左)は「日本語はおもしろい」。別の児童はひらがなで名前を書いた。幼稚園や低学年の授業では、教師が身ぶり手ぶりやスライドを使い、五感をフルに生かして日本語の意味を理解させる。英語と日本語の併用で、学力低下の不安はないのだろうか。全体のカリキュラムを調整する鎌田良子教諭は「子供の頭の中で、英語で学んだことと日本語で学んだことがうまくつながっている。親も家庭で勉強が遅れないようにサポートしてくれている」と話す。リッチモンド小では、父が母らが学校の運営資金のために募金活動を展開。習字など、授業で特殊なカリキュラムを組む場合、外部から招く教師の資金は親たちが出し合

□中国語人気

ポートランドとその近郊で、イマージョン・プログラムを持つのは小学校から高校までの十七校。このうち日本語と中国語は三校ずつあり、その他の多くは中南米からの移民向けのスペイン語

かして日本語の意味を理解させる。英語と日本語の併用で、学力低下の不安はないのだろうか。全体のカリキュラムを調整する鎌田良子教諭は「子供の頭の中で、英語で学んだことと日本語で学んだことがうまくつながっている。親も家庭で勉強が遅れないようにサポートしてくれている」と話す。リッチモンド小では、父が母らが学校の運営資金のために募金活動を展開。習字など、授業で特殊なカリキュラムを組む場合、外部から招く教師の資金は親たちが出し合

う。時には、教師の補佐役として授業に参加することもある。